

アトス編

——シュバリ工学園のホール

アトスをはじめとする銃士隊の活躍で
学園を騒がせていた悪魔騒動は一件落着した。
そして、呪いを解かれ人間に戻った銃士隊は、
生徒を守った英雄として讃えられ、
これまで通りの学園生活を送った。

——事件解決から半年後の春。卒業式。

ロシナンテ 「続きまして、卒業生を代表しての答辞を
銃士隊隊長、アトス君、お願いします。」

アトス 「はい。」

ダルタニアン(今日はとうとう卒業式……
アトスさんとアラミスさんが卒業する……)

アトス 「本日は多数のご来賓の方々のご臨席を賜り、
シュバリ工学園、卒業証書授与式を挙行していただき
卒業生一同、心より御礼申し上げます。」

ダルタニアン(……冬休みの間に学園の補修工事も終わって、
それぞれ日常に戻ろうと努力してる……
そんなことがあったけど……良かった……)

プランシエ 「(ボソツ) ねえ、ダルタニアン。
……ちょっと、ダルタニアンってば。」

ダルタニアン「あ、プランシエ。」

プランシエ 「ひょっとして……彼氏の答辞に見惚れてた？」

ダルタニアン「えっ？」

ボナシユー 「ダルタニアンちゃん、ダルタニアンちゃん!
今日もキミ、可愛いね! 賢く見えるね! 偉く見えるね!」

プランシエ 「ちょっとボナシユー!
急にダルタニアンにすり寄るのやめてよね!
ダルタニアンが迷惑してるでしょ!」

ダルタニアン「しーっ。
皆が見てるよ。」

プランシエ（はっ……!）

ボナシユー（はっ……!）

ロシナンテ「では続きまして、シュバリ工学園銃士隊
引き継ぎ式をおこないます。

次年度の銃士隊隊長ダルタニアンさん。前へ。」

ダルタニアン「はい。」

——ガタン。

ダルタニアン（アトスさんから私に銃士隊隊長の任が引き継がれる……）

アトス「……」

ダルタニアン（ステージでアトスさんが微笑んで……）

ああ……ここでアトスさんの笑顔を見るのも
今日で最後なんだな……）

——ダルタニアンがステージに向かい歩いていく。

ロシナンテ「アトス君、ダルタニアンさんへ

引き継ぎをお願いします。」

アトス「はい。」

ではダルタニアン。剣を。」

ダルタニアン「はい。」

——カキーン、と剣を合わせる音がホールに響く。

アトス「ダルタニアン。

シュバリエの掟に従い、銃士隊の隊長として
学園の生徒を守り、導くことを誓つか。」

ダルタニアン「誓います。」

アトス「どのような苦難があろうとも、団結し、

目標を見失わず、乗り越えていくことを誓つか。」

ダルタニアン「誓います。」

アトス 「学園と生徒のことを第一に考えると同時に、
騎士道精神のもと、自分自身をも大切にすると誓つか。」

ダルタニアン「はい。誓います。」

アトス 「よし。では。」

私、アトスは、只今よりダルタニアンに
シユバリエ学園銃士隊隊長の任を譲り渡します。」

ダルタニアン「私、ダルタニアン。」

謹んでその任をお受け致します。」

——剣を合わせる音がホールに響く。

アトス 「二人は皆のために。」

ダルタニアン「皆は一人のために。」

——拍手。

アトス 「銃士隊隊長ダルタニアン。頼んだぞ。」

ダルタニアン「はい！」

——大拍手。

コンスタンティン(あくあ。アトス先輩とあんなに
見つめ合っちゃって、もう……先輩〜！)

ロシナンテ 「では書類にサインをお願いします。」

アトス 「はい。」

ダルタニアン「はい。」

アラミス (……あ、女の子たちが僕を見てる……
ちよつと手を振っておごつかな)

女の子一同 (きゃあ〜！)

アラミス (僕が悪魔だったこと、忘れちゃったのかな……？ ふふっ)

ポルトス (くっそー！ 何でオレが隊長じゃねえんだよー！)

——夕暮れの砂浜。

ダルタニアン「……アトスさん。

明日の引き潮でこの島を去ってしまうんですね。」

アトス 「寂しいか？」

ダルタニアン「と、当然です。

……生徒会室に行っても

もうアトスさんがいないなんて……」

アトス 「すぐ会える。心配するな。」

ダルタニアン「……」

アトス 「休みの度に会いにくる。

お前の部屋に泊まりにな。」

ダルタニアン「……いいんですか？

でも、あの……」

アトス 「これからはお前が銃士隊長だ。

責任を持って上手くやってくれ。」

ダルタニアン「え、あ、はい！」

アトス 「ふっ……ははははっ。

頼んだぞ。色々。」

ダルタニアン「もうっ!!」

アトス 「……ダルタニアン。」

ダルタニアン「はい？」

アトス 「さっき、引き継ぎ式で俺の名の横にサインをしただろっ?」

ダルタニアン「はい。」

アトス 「ただの形式的な銃士隊の儀式だが……

俺にとっては何か特別なものを感じた。」

ダルタニアン「え……?」



アトス 「いつか同じことができたらいいな。
教会で……」

ダルタニアン 「……………」

アトス 「……………」

おい、そんなに見るな。」

ダルタニアン 「だって……」

……今、とつても大事な言葉を聞いたから……」

アトス 「ふっ……」

お前が喜ぶなら何度でも言っつてやる。」

ダルタニアン 「……え……」

アトス 「ダルタニアン。
愛してる。」

……………」

……この学園を卒業するその日まで

剣を捧げると誓ったが……

我が君ダルタニアンのため

一生、変わらぬ忠誠と永遠の愛を誓おう。」

ダルタニアン 「アトスさん……………」

アトス 「さあ、承諾してくれ。」

ダルタニアン 「あ……」

アトス 「さあ。」

ダルタニアン 「……アトスさん。」

私も一生、アトスさんに

変わらぬ忠誠と永遠の愛を誓います。

ずっとずっとついて行きます……………」

アトス 「ふっ……、今の言葉、忘れるな。」

……お前がここを卒業するときは必ず迎えにくる。

いいな。」

ダルタニアン 「は………」

ダルタニアン「アトスさんは決闘のときと同じように
跪いて誓ってくれた。

私も一生、アトスさんを愛します。
このお父さんの剣とシュバリエの海に誓います」

アトス 「……ダルタニアン。

休みの度に会いに来ると言ったが……
お前が俺の家に来てもいいんだぞ。
俺の両親を紹介したいいな。」

ダルタニアン「あ……

私、お父様やお母様に
認めてもらえるでしょうか……」

アトス 「問題ない。

お前はお前のままで大丈夫だ。」

ダルタニアン「でも……」

アトス 「お前……
俺の言うことが信じられないか？」

ダルタニアン「い、いえ……
あっ……！」

アトス 「この俺がこんな風にお前を抱きしめていたら……
両親も何も言えないと思うがな。」

ダルタニアン「……でも、私も努力しますね。
ちゃんと認めてもらえるような女性になります。」

アトス 「……ふっ……」

ダルタニアン「どうして笑うんですか？」

アトス 「いや。
……ただ……お前なしの人生はもう
俺には考えられないと思ったただけだ。
……分かったな？」

ダルタニアン「は……！」